

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2012

課題番号：20242017

研究課題名（和文）倉富勇三郎日記研究—IT 応用新研究支援ツールの導入による全文翻刻と注釈の作成

研究課題名（英文）The Study of Kuratomi Yuzaburo's Diary; Making a full text transcription with some annotations by a new ITC research tool.

研究代表者

永井 和 (NAGAI Kazu)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：40127113

研究成果の概要（和文）：日本近代史の 1 級史料でありながら、膨大な分量と読みにくい文字のために、その利用が一部の研究者のみに限られていた倉富勇三郎日記の翻刻をおこない、1919 年 1 月から 1926 年末までについては翻刻を完了した。そのうち 1919 年 1 月から 1922 年末までの日記については『倉富勇三郎日記』第 1 巻、第 2 巻として国書刊行会から出版した。翻刻作成にあたっては、京都大学文学研究科で開発中の史料・文献研究支援 ICT ツールである SMART-GS を使用した。

研究成果の概要（英文）：KURATOMI Yuzaburo (1853-1948) was a bureaucrat-politician of Meiji, Taisho and early Showa era, being the Chairman of Privy Council from 1926 to 1934. He is famous for his detailed diary which he continued to keep from 1919 to 1947. It is the first class historical document of the political and social life of Imperial Japan and reveals a lot of inside stories about the Imperial Household and the Privy Council. However, due to his illegible handwriting and enormous volumes, it is very difficult for even a professional researcher to read the diary. To make it easier, we are making a transcription of Kuratomi diary from 1919 to 1934 and already have published a part of them (the diary of 1919-1922). To make the transcription of the diary, we use smart-gs, a new ICT tool, developed by the Graduate School of Kyoto University.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	9,900,000	2,970,000	12,870,000
2009 年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
2010 年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
2011 年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
2012 年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
総計	33,200,000	9,960,000	43,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近現代史 倉富勇三郎 倉富日記 SMART-GS

1. 研究開始当初の背景

倉富勇三郎 (1853～1948) は、明治・大正・昭和戦前期に活躍した官僚政治家であり、司法省、統監府・朝鮮総督府、内閣法制局、宮内省に奉職したあと、枢密顧問官となり、1926 年から 1934 年まで 8 年間にわたり枢密

院議長をつとめた。倉富は膨大かつ詳細な日記を残したことでよく知られており、そこには彼が職務上知りえた情報はもとより、宮内省、枢密院、内閣、司法部、朝鮮総督府の高官達との間でかわした会話の内容が克明につづられている。

1970年代後半に国立国会図書館憲政資料室で倉富日記が公開されて以来、数多くの研究者がこれを利用してきた。その史料価値の高さは多くの研究者が一致して認めるところである。しかしながら、その分量が膨大である（現存しているのは1919年初めから1947年11月末までの日記304冊に、東京控訴院検事長時代の執務日誌である1905年7月～1906年8月の4冊を加えた308冊である。このうち1945年初めから1947年11月末までの7冊を除いた301冊が国立国会図書館に所蔵されている）うえに、普通の人間にはとても判読できそうもない、クセのある手書き文字で細かくビッシリと書かれているため、それなりの訓練を受けた専門家でなければ、日記を読むことができない。また専門家であっても、そのあまりに膨大な量のために、日記全編を通読しえた者はほとんどいない。

研究代表者の永井は倉富日記をはじめて読んだときから、この貴重な史料を研究者だけの世界にとどめず、広く一般国民のさらには世界中の共有財産とすべきではないかとの思いを有していたが、今まで何度かそれが試みられては挫折したことを知るにつけ、とうてい不可能だとあきらめていた。ただ、1998年頃から担当する大学院の演習でテキストに使用し、細々ながら解読の作業を続けており、歩みは遅くとも、その作業の結果が蓄積され、倉富日記を解読できる人材も育ちつつあった。その一方で、倉富日記への一般的な関心が高まるのを見て、日記を用いて研究をおこなう段階から、日記そのものをより多くの人間が読めるようにすべき時期に、今やさしかかっているのではないかとの思いが次第に強まり、及ばずながらその翻刻・刊行に挑戦してみようと決意するにいたった。2008年に倉富勇三郎日記研究会を発足させ、翻刻・刊行事業に着手することにしたのである。

2. 研究の目的

(1)『原敬日記』に匹敵する日本近代政治史研究上の第一級史料である倉富勇三郎日記を翻刻し、注釈と解説をほどこすこと、それによって難解な手書き文字で書かれているため、ごく限られた少数の研究者たちだけしか利用できなかったこの貴重な歴史資料を、学界のみならず、日本国民さらには世界中の共有財産とすること、さらに翻刻した日記を学術図書として出版することが第1の目的である。

(2)倉富日記の翻刻作業を進めるにあたって、京都大学文学研究科の情報・史料学研究室が開発を進めている文献学・史料学研究用の新しいツール SMART-GS を使用する。SMART-GS はデジタル画像化された手書き

文字資料の翻刻と解析のための新たな ITC 研究支援ツールである。これを利用して倉富日記の翻刻をおこない、このツールが実用にたえるものであることを検証するとともに、手書き文書の読解を必須のものとする歴史研究において、新たな技法の確立にむけて実験をおこなうことが、本プロジェクトの第2の目的である。

(3)翻刻した倉富日記を史料として用い、1920年代から1930年代の日本政治・外交史および精神史にかかわる、いくつかの重要なテーマについて研究をおこなう。それが第3の目的である。そのテーマとしては、倉富日記にみる宮中問題の研究、倉富日記にみる天皇の政治権力と権威の研究、倉富日記にみる政党政治期の司法官僚と政治の研究、倉富日記にみる中国問題・中国認識の研究、倉富日記にみる朝鮮植民地支配の研究等があげられる。

3. 研究の方法

日記の翻刻・刊行の作業工程は、1 翻刻→2 校閲→3 整形→4 人名注釈→5 印刷（校正・解説・人名索引）という流れになる。このうち、SMART-GS を使用するのは、1 翻刻と2 校閲の工程だけであり、3以降の印刷刊本作成の工程では使用されない。SMART-GS には翻刻テキストだけを抜き出して書き出す機能があり、それを使って校閲の終わった翻刻テキストを Word のファイルに流し込み、印刷組版にあわせて整形する。さらに人名注釈をほどこし、印刷原稿が完成する。ここまでは Word を使っての作業となる。5は解説を書く作業をのぞき、印刷された校正ゲラ（紙媒体）を対象におこなう作業である。

この1～5の工程を11（研究代表者・分担者8人、研究協力者3人）人で分担しながらおこなってきた。翻刻は、日記帳の冊子1冊を1翻刻単位とし、原則として1人の翻刻者がその単位全部を翻刻することとし、5～6人がそれに従事した。これがいちばん骨の折れる作業である。翻刻の終わったファイルは校閲者に渡され、校閲がおこなわれる。これも原則として1翻刻単位を1人の校閲者で校閲し、3～4人がこれにあたった。いっぽう整形、人名注釈、印刷（校正・解説・人名索引）の3つは印刷用原稿作成のための一連の工程であるので、3～4人がこの3つをあわせて担当している。各工程の作業間連絡は、メール、メーリング・リストを使用し、ファイル交換には商用のストレージ・サービスを利用してきた。

SMART-GS の WebDAV クライアント機能が利用できるようになった2010年以降は、翻刻・校閲の作業は WebDAV サーバ上のファイルを編集することでおこなってい

る。

2008年初めから翻刻を開始したが、最初からすぐにSMART-GSを使って翻刻できたわけではない。まず、国会図書館から購入した倉富日記のマイクロフィルムから日記のデジタル画像を作成する必要があった。SMART-GSが利用できるようになったのは、2008年11月になってからであるが、この時点ではSMART-GSにはネットワーク機能がそなわっていないかった。

複数の人間が協働して翻刻・校閲作業をおこなうので、メンバー全員の作業環境を一致させておかないといけない。とくに重要なのは、日記の画像の入ったフォルダの構造とその置き場所を一致させておくことである。そのために、倉富日記の全画像をおさめたポータブル・ハードディスク（容量250GB）を各メンバーに配布し、そのハードディスクのドライブ名を固定し（作業をおこなうすべてのPCにおいて、そのハードディスクが常にZドライブになるように設定した）、さらにSMART-GSのPreferenceのImagesの配置をZドライブ以下のフォルダになるよう設定した。また、日記の画像のファイル名のつけ方、画像を収納するフォルダのディレクトリ構造なども、あとで問題の生じないように工夫しておく必要がある。

SMART-GSの画像文字検索とネットワーク機能を使用できるようになったのは、2010年5月からであり、そのためにSMART-GSのバージョンアップと作業環境の変更をおこなった。

4. 研究成果

(1) 研究の主目的である倉富日記の翻刻・刊行については、1919年～1922年分については、『倉富勇三郎日記』第1巻、第2巻としてすでに刊行済みである（2010年、2012年）。続く1923、24年分もすでに印刷にまわっており、現在初校を校正中である。2013年10月末には刊行の予定である。

それ以後の分の進捗状況は、第一次翻刻については1926年分までが完了しており、1925年分については校閲もおわっている。1927年分の翻刻は未完成であるが、おおよそ3分の2が終わっている。

最初想定していたよりも翻刻と校閲に時間がかかり、翻刻・校閲・注釈作業が予定よりも遅れてしまった。これは日記の分量についての予測が甘かったことが主因であるが、他の原因としては、日記の出版刊行のための原稿作成、校正作業にかなりの時間をとられたこともあげられる。出版となると、たんに翻刻の作成ではすまず、いろいろと技術上の問題が発生し、それに対応するのに研究代表者が多くの時間を費やさざるをえず、そのために全体の作業の流れが停滞したのである。

(2) 国書刊行会から刊行された『倉富勇三郎日記』第1巻は、地味な学術史料の刊行としてはまれにみる注目を浴び、少なからぬ新聞、雑誌において注目すべき文化事業として紹介された。

(3) SMART-GSの利用については、システムの改良（ネットワーク機能の付加）に時間がかかり、実際にSMART-GSのネットワーク機能を使っての協働翻刻システムが軌道にのったのは、2010年度半ばからであった。また、協働翻刻システムを稼働させるために作業者の作業環境を統一する必要があるが、人数が多いとこれが簡単でないことがわかった。トラブル発生時の対処法が問題である。しかし、試行錯誤の結果、SMART-GSを使用した協働翻刻作業システムの原型を確立することができた。このようなオンラインによる協働翻刻作業の実践例はおそらく世界でもごく少数であり、ICTツールの人文学への応用について新たな局面を開くことができたと自負している。なお、本プロジェクトの実践例およびその過程で見つかった諸問題は、SMART-GSの開発者にフィード・バックされており、SMART-GSの改良に大きく寄与している。

(4) 翻刻と出版事業の遅れにより、いちばん影響を受けたのが、倉富日記を史料として各分担者がおこなう研究の分野であった。主たる成果をあげると、宮中研究については、永井が倉富日記を材料に1920年の「皇族の降下に関する施行準則」の制定過程をはじめて明らかにした。小山俊樹はその政党内閣期の政治史研究に倉富日記を活用し、枢密院議長としての倉富の政治手法に新たな解釈を提示した。また河西は刊行された倉富日記を使って大正デモクラシー期の宮内省内に天皇と皇室の機能についていくつかの異なる解釈が存在していたことを明らかにした。Lee Sung yupは倉富日記に記されている記事をきっかけに、李太王毒殺説についての研究をおこない、さらにそれに連続する李太王の諡号、建廟、造陵についても研究をおこなった。これは韓国においても大いに注目された。2009年に倉富日記掲載の李太王毒殺の噂についての記事に関連して、研究代表者の永井とLeeは韓国放送の取材を受け、同年8月15日の記念番組で放送された。

最初の計画では想定していなかったが、本プロジェクトで行った倉富家所蔵資料の調査により未見の新史料をいくつか発掘できた。とくに倉富の朝鮮総督府勤務時代の写真がまとまって出てきたのは、大きな発見である。この所蔵写真の一部の解析を京都大学人文科学研究所水野直樹教授と同大学人間環境学研究科西垣安比古教授に委嘱したところ、韓国併合前後の朝鮮総督府の京城都市構想についてあらたな知見を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

①永井和・川寄陽「SMART-GS を利用した倉富勇三郎日記の翻刻と倉富家所蔵史料について」『二十世紀研究』13 号, 2012 年, 1-41 頁, 査読有

②河西秀哉「新しい皇室像への宮中の対応—『倉富勇三郎日記』を通じて—」『二十世紀研究』13 号, 2012 年, 43-60 頁, 査読有

③小山俊樹「政党内閣期の財政的緊急勅令と枢密院—台湾銀行救済案と満洲事件費支出案をめぐる枢密院議長倉富勇三郎の動向を中心に—」『二十世紀研究』13 号, 2012 年, 61-82 頁, 査読有

④永井和「波多野敬直宮内大臣辞職顛—一九二〇年の皇族会議—」『立命館文学』624 号, 2012 年, 493-511 頁, 査読無

⑤小山俊樹「「憲政常道」と「政界縦断」—大正期二大政党制の政治戦略—」『帝京史学』27 号, 2011 年, 21-80 頁, 査読無

⑥小山俊樹「日露戦争後の二大政党論の形成」『帝京史学』26 号, 2011 年, 査読無

⑦桂川光正「関東州阿片令制定をめぐる一考察」『大阪産業大学人間環境論集』9 号, 2010 年, 1-22 頁, 査読無

⑧林晋・永井和・宮崎泉「文献研究と情報技術—史学・古典学の現場から—」『人工知能学会誌』25 巻 1 号, 2010 年, 24-31 頁, 査読有

⑨Lee Sung yup「李太王 (高宗) 毒殺説の検討」『二十世紀研究』10 号, 2009 年, 1-42 頁, 査読有

⑩小山俊樹「関東大震災後の都市計画と政治」『大正イマジュリ』4 号, 2009 年, 28-37 頁, 査読有

[学会発表] (計 10 件)

①永井和・川寄陽「SMART-GS を使用した倉富勇三郎日記の翻刻事業について」京都大学現代史研究会, 2012 年 7 月 21 日, 京都市・京都大学

②河西秀哉「新しい皇室像への宮中の対応—『倉富勇三郎日記』の検討を通じて—」京都大学現代史研究会, 2012 年 7 月 21 日, 京都市・京都大学

③Lee Sung yup「高宗 (李太王) 毒殺説のメタヒストリー」The Yonsei Japanese Studies Workshop Series 17, 2012 年 3 月 9 日, 韓国ソウル市・延世大学

④Lee Sung yup「滅びし王朝の君主を如何に称すべきか: 李太王 (高宗) の諡号・陵号・

建碑問題」朝鮮学会第 61 回大会, 2010 年 10 月 3 日, 天理市・天理大学

⑤Lee Sung yup「高宗「毒殺説」のメタヒストリー」延世大学 BK21 (「社会的包摂と排除」事業団・「アジア的政治政治学」) 共同コロキウム, 2010 年 9 月 13 日, 韓国ソウル市・延世大学

⑥林晋・永井和・寺沢憲吾「文献資料研究用ツール SMART-GS と画像文字検索エンジン」文化とコンピューティング国際会議, 2010 年 2 月 22, 23 日, 京都市・京都大学

⑦Lee Sung yup「高宗太皇帝／李太王の諡号・陵号・陵碑問題」漢陽大学校東アジア文化ネットワーク・京都大学朝鮮韓国学教育研究ネットワーク共催日韓文化交流史合同セミナー, 2009 年 2 月 11 日, 京都市・京都大学

[図書] (計 4 件)

①倉富勇三郎日記研究会 (代表永井和) 編『倉富勇三郎日記』第 2 巻, 2012 年, 1274 頁, 国書刊行会

②倉富勇三郎日記研究会編『倉富勇三郎日記』第 1 巻, 2010 年, 930 頁, 国書刊行会

③永井和「田中義一内閣期の朝鮮総督府官制改訂問題と倉富勇三郎」松田利彦・やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』, 2009 年, 497-561 頁, 思文閣出版

[その他]

ホームページ等

倉富勇三郎日記研究 (<http://nagaikazu.la.cocacn.jp/kuratomi/kuratomi.html>)

なお、このサイトに本研究による研究成果をまとめた PDF ファイルを掲示している。

<http://nagaikazu.la.cocacn.jp/kuratomi/akenreport2.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永井 和 (NAGAI Kazu)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号: 40127113

(2) 研究分担者

桂川 光正 (KATSURAGAWA Mitsumasa)

大阪産業大学・人間環境学部・教授 (平成 24 年 3 月死去)

研究者番号: 30177422

Lee Sung yup (Lee Sung yup)
佛教大学・歴史学部・准教授
研究者番号：50378882
小山 俊樹 (KOYAMA Toshiki)
帝京大学・文学部・准教授
研究者番号：90454503
佐野 方郁 (SANO Masafumi)
大阪大学・日本語日本文化教育センター・
准教授
研究者番号：10403205
河西 秀哉 (KAWANISHI Hideya)
神戸女学院大学・文学部・講師
研究者番号：20402810
三川 譲二 (MIKAWA Joji)
舞鶴工業高等専門学校・人文科学部門・教
授
研究者番号：40259891
富永 望 (TOMINAGA Nozomu)
京都大学・文学研究科・講師
研究者番号：20572069

(3) 連携研究者

林 晋 (HAYASHI Susumu)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：40156443

(4) 研究協力者

宮田 昌明 (MIYATA Masaaki)
一燈園資料館「香倉院」嘱託
研究者番号：なし
鹿 雪瑩 (Lu Xueying)
日本学術振興会外国人特別研究員・同志
社大学客員研究員
研究者番号：なし
川崎 陽 (KAWASAKI Akira)
佛教大学文学部非常勤講師
研究者番号：なし